

文化

花と子ども

画家

いわさきちひろ

生誕100年

至光社の武市八十雄、童心社の稲庭桂子と渡辺泰子のように、ちひろを評価し理解する編集者との出会いによって、ちひろの絵は輝きを増していった。50歳を前にした1960年代後半から代表作が次々と生まれる。ちひろは技術的にも果敢な挑戦をし、70年には、太い線しか引けないパステルを線描に使う新しい画法を生み出した。この技術を用いてスケールの大きな作品が登場する。

また、世阿弥が著した能の芸術論「風姿花伝」に興味を持ち、抑えた表現の中にこそ深い味わいが生まれるという美意識に確信を持つ。こうして、大胆に余白を作り、太い筆やはけを使って筆勢を生か

「戦火のなかの子どもたち」

松本 猛 ⑱

東京空襲の体験 重ね合わせ

し、にじみを活用したちひろ独自の世界が誕生する。

一方、日本の世の中は70年安保闘争や沖縄返還、ベトナム戦争の激化などで激しく揺れ動いていた。米軍のベトナム攻撃では無差別爆撃やシエノサイド(集団虐殺)も行われ、米国内をはじめ世界中で大きな反戦運動が起こった。

ちひろは、日本からも出撃する米軍爆撃機による戦争報道を目にするたびに、自分が体験した東京空襲を思い出すと語り、画家仲間たちとともに「ベトナムの子供を支援する会」の活動に積極的に参加するようになる。また、絵の仕事でも平和への願いを込めた作品が現れる。

72年5月のグループ展にちひろは3点の絵を出品した。そこには戦火の中で心が傷ついた子どもが描かれていた。岩崎書店の編集長、小西正保はこの絵を見て絵本を作りたいと申し出る。絵本「戦火のなかの子どもたち」はこうして制作が始まった。ちひろは、東京空襲で見た子どもたちと、ベトナムの子どもたちを重ね合わせながら作品を描いた。

この母子像は最後に描いた一点で、「母さんといっしょに／もえていった／ちいさなぼうや」という言葉がついている。母親の瞳には子どもを命を奪う戦争への怒りが込められている。それは、まさにちひろ自身の心情の発露だった。

絵本は73年9月に出版された。その1カ月後に肝臓がんが発見され、ちひろは翌74年8月8日、55歳の生涯を閉じることになる。

(美術評論家)

土曜日に掲載します



「焰(ほのお)のなかの母と子」1972年
(ちひろ美術館所蔵)